目白大学　健康科学研究
第11号　2018年　89－94

作業療法学生における長期臨床実習の満足感に影響する要因

金野達也　佐藤佐和子　時田みどり
（Tatsuya KANENO　Sawako SATO　Midori TOKITA）

【要約】

《目的》本研究は、長期臨床実習の満足感に影響する要因を明らかにすることを目的とした。

《方法》8週間の長期臨床実習を経験した学生62名を対象とした。調査内容は臨床実習の満足感と満足感との関連が予測される12項目について、アンケート調査を実施した。12項目に因子分析を実施し、抽出された因子を独立変数とし、臨床実習の満足感を従属変数として重回帰分析を行った。

《結果》臨床実習の満足感に、「環境要因」と「理解度」が影響していることが明らかとなった。

《結論》長期臨床実習の満足感を高めるためには、良好な実習環境を整え、理解が深まるような指導の重要性が示唆された。

キーワード：臨床実習、満足感、作業療法学生

Ⅰ．はじめに

医療の高度化や患者の権利者意識の高まりに伴い、保健・医療・福祉を取り巻く環境は日々変化してきており、作業療法士に求められる資質向上が益々問われるようになっている。作業療法臨床実習手引き第4版[1]でも、臨床実習の目的は、「作業療法士としての知識と技術・技能及び態度を身につけ、保健・医療・福祉に関わる専門職としての認識を高めることである」と明示されている。この事から、作業療法士は、基礎・専門領域の知識や技術だけでなく、コミュニケーション能力や専門家としての適切な態度や行動も習得することが求められるようになっている。臨床実習は、このような作業療法士に必要な知識、技術、態度を総合的に学習し、問題解決能力を身につける重要な教育過程である。特に長期臨床実習は、卒業後の進路や作業療法士としてのアイデンティティの確立にも大きな影響を及ぼす経験であり、養成校の教員や実習施設の臨床教育者はその教育課程を支援する役割を担っている。

世界作業療法士連盟[2]は、「作業療法の成果は、クライアントが決め、作業参加や作業参加から得られる満足、あるいは作業遂行上の向上において測定される」と明示している。また、世界作業療法士連盟[2]は、対象者の範囲を健康障害のある人だけではなく、作業に参加する全ての人にまで広げているため、臨床実習という作業に参加している学生も、クライアントとして捉えることができる。そのクライアントである学生が、重要な教育課程である臨床実習に対して満足感を得られたかどうかは、適切な教育サービスを提供できたかどうかを判断するための重要な指標となる。また、臨床教育者にとっても、臨床実習の満足感は、学生に効果的な指導を行う事ができたかどうかを確認し、より良い実習指導をするために役立てることができるため、重要な指標の一つといえる。簗瀬ら[3]は、作業療法学生が臨床実習に満足する要因として、臨床教育者との関係、有意義な課題、作業療法部門の病院での位置づけ、患者に喜ばれることが影響していると報告した。また、作業療法学生だけではなく、言語聴覚学生[4]、医学生[5]、看護学生[6]、理学療法学生[7]な

かねのたつや：目白大学保健医療学部作業療法学科
さとうさわこ：目白大学保健医療学部作業療法学科
ときたみどり：目白大学保健医療学部作業療法学科

ど、医療分野の学生を対象として、臨床実習の満足感に関する研究は広くなされているものの、作業療法学生を対象としたものは、先に挙げた篠瀬ら[3]の報告以外になく、作業療法学生における臨床実習の満足感に影響している要因についての知見は十分ではない。そこで、本研究では、作業療法学生における長期臨床実習の満足感に影響する要因を明らかにすることを目的とした。

Ⅱ．対象と方法

1．対象者

対象者は、本学作業療法学科の学生で、「レベル３（総合）臨床実習Ⅰ」を履修しており、８週間の臨床実習を経験した62名とした。研究協力に際し、個人情報の取り扱いには十分に注意し、回答をもって、研究協力に同意を得たとすることを伝えた。また、研究協力の有無によって、何ら不利益を被ることがないことを伝え、倫理的配慮をしたうえで研究を行った。

2．方法

（1）調査項目

長期臨床実習の満足感に影響する要因を明らかにするために、無記名式アンケート調査を実施した。アンケート項目は、身体・精神障害領域の作業療法実践の経験を有する教員１名ずつ、心理学を専門とする教員１名の計３名で、過去のアンケート結果や学生への聞き取り調査を参考に、１回１時間程度、計３回の議論を経て、臨床実習の満足感と関連のありそうな12項目を抽出した（表１）。この12項目について「全く当てはまらない」（１点）から「よく当てはまる」（４点）の４件法で調査した。臨床実習の満足感は、「実習全体を通して満足したか」という問いに対して、「全く当てはまらない」（１点）から「よく当てはまる」（４点）の４件法で回答してもらった。アンケート調査は、実習終了後１週間以内に行われたセミナー時に実施し、その場で回収した。

（2）データ分析

データ分析は、まず12項目の変数に対して、探索的因子分析（主因子法、バリマックス回転）を実施した。最終的に得られた因子の内的一貫性を確認するために、Cronbachのα係数を算出した。次に、因子分析の結果、抽出された因子を独立変数とし、臨床実習の満足感を説明変数として、重回帰分析（ステップワイズ法）を実施した。統計処理には、IBM SPSS Statistics 23で、有意水準を５％未満とした。

Ⅲ．結　果

本アンケート調査に対する有効回答数は62名であり、有効回答率は100％であった。臨床実習の満足感の平均値は3.4 ± 0.7点であった。因子数は、固有値１以上の基準を設け、スクリープロットの傾きの変化や、因子の解釈可能性も考慮した結果、３因子が妥当であると判断された。そして、「1．実習前の生活面

表１　アンケート項目

実習の満足感
実習全体を通して，満足であった．
実習の満足感に関連する質問12項目
1.　実習前の生活面での準備は，充分であった．
2.　実習前の学習面での準備は，充分であった．
3.　自覚と学習意欲を持って，真摯な態度で実習に臨んだ．
4.　実習に臨むにあたって，とても不安であった．
5.　実習に集中して取り組む生活環境が維持されていた．
6.　自己学習が必要と思われた部分について，理解を深められた．
7.　教員からの指導や助言は適切であった．
8.　実習後の学内課題によって，評価や治療（介入/支援）への理解が進んだ．
9.　施設全体として，良好な実習環境であった．
10.　臨床教育者と教員との方針が異なり，戸惑うことがあった．
11.　実習を通して，評価・治療（介入/支援）についての理解が進んだ．
12.　評価・治療（介入/支援）の計画の立て方が理解できた．

表２　因子分析結果

	第１因子 理解度	第２因子 環境要因	第３因子 自己学習	共通性	平均	標準偏差
12.　評価・治療（介入/支援）の計画の立て方が理解できた.	0.84	−0.13	0.12	0.74	3.2	0.6
11.　実習を通して、評価・治療（介入/支援）についての理解が進んだ.	0.80	0.19	0.00	0.67	3.4	0.7
10.　臨床教育者と教員との方針が異なり、戸惑うことがあった.	0.18	−0.72	0.04	0.55	2.2	1.1
7.　教員からの指導や助言は適切であった.	0.03	0.64	0.11	0.42	3.3	0.8
9.　施設全体として、良好な実習環境であった.	0.29	0.62	−0.03	0.46	3.5	0.7
8.　実習後の学内課題によって、評価や治療（介入/支援）への理解が進んだ.	−0.02	0.11	0.73	0.54	3.1	0.8
2.　実習前の学習面での準備は、充分であった.	0.08	−0.14	0.55	0.33	2.6	0.8
6.　自己学習が必要と思われた部分について、理解を深められた.	0.04	0.07	0.49	0.25	3.2	0.6

因子抽出：主因子法
回転法：バリマックス回転

での準備は、充分であった」「3.　自覚と学習意欲を持って、真摯な態度で実習に臨んだ」、「4.　実習に臨むにあたって、とても不安であった」、「5.　実習に集中して取り組む生活環境が維持された」の４項目は、共通性が0.2未満、因子負荷量0.4以下、２因子にわたる因子負荷量が0.35以上であったため削除することとした。最終的に８項目で再度因子分析を行なった結果、回転前の３因子で、累積説明率は49.5％であった（表２）。

第１因子は、「12.　評価・治療（介入／支援）の計画の立て方が理解できた」と「11.　実習を通して、評価・治療（介入／支援）について理解が進んだ」の因子負荷量が高かったことから、「理解度」と解釈した。第２因子は「10.　臨床教育者と教員との方針が異なり、戸惑うことがあった」、「7.　教員からの指導や助言は適切であった」、「9.　施設全体として、良好な実習環境であった」の因子負荷量が高かったことから、「環境要因」と解釈した。第３因子は、「8.　実習後の学内課題によって、評価や治療（介入／支援）への理解が進んだ」、「2.　実習前の学習面での準備は十分であった」、「6.　自己学習が必要と思われた部分について、理解を深められた」の因子負荷量が高かったことから、「自己学習」と解釈した。探索的因子分析の結果から抽出された３因子のα係数は、「理解度」が0.78、「環境要因」が0.66、「自己学習」が0.61であった。

臨床実習の満足感についてステップワイズ法による重回帰分析の結果、決定係数は0.47であり、臨床実習の満足感に、「理解度」（$\beta = 0.56$、$p = 0.00$）と「環境要因」（$\beta = 0.40$、$p = 0.00$）が有意な影響を及ぼしたことが示された（表３）。「自己学習」（$p = 0.81$）は有意な影響を及ぼさなかった。また、共線性診断を行なったところ、多重共線性は認められなかった。

表３　重回帰分析

	偏回帰係数	標準偏回帰係数（β）	p
定数	3.39		0.00
理解度	0.41	0.56	0.00
環境要因	0.31	0.40	0.00
自己学習	−0.02	−0.02	0.81
n=62	R^2=0.47		

Ⅳ．考　察

本研究の結果から、長期臨床実習の満足感に、「理解度」と「環境要因」が有意な影響を及ぼしたことが明らかになった。因子分析の結果から、「理解度」は、「12.　評価・治療（介入／支援）の計画の立て方が理解できた」と「11.　実習を通して、評価・治療（介入／支援）についての理解が進んだ」という項目で構成された。「理解度」の得点が高い学生は、実際の臨床現場でどのような評価に基づいて介入計画が立案され、またその計画実行によってどのような結果をもたらすことができるのかについて理解することができたと考えられる。そして、臨床実習を通じて、「理解度」を高められたことが、臨床実習の満足感に影響したことがわかった。原ら[4]は、言語聴覚学生を対象とし、臨床実習の満足感と知識・技術の習得との関連性について報告しており、本研究で得られた結果と同様であった。また、中川[8]は「教師というのは教えるのではなく、学ぶのを助ける仕事」であると述べている。このことからも、ただ単に知識や技術を伝えるだけではなく、本人がそれを理解したレベルになるように指

導することが重要であるということが示唆された。しかし、現在の臨床実習では、作業療法プロセスに沿って経験をしていく方法がとられているため、学生がプロセスの途中で行き詰った場合、それができるようになるまで、次のステップに進めなくなり、学生の理解を効果的に深めることができていないことが指摘されている[9、10]。このような事態を未然に防ぐためにも、臨床教育者は、学生が理解しやすいところから始める、もしくは理解できたと感じられる事を増やすような、学生の理解度に合わせた指導が重要であると考えられる。そして、このような学生の理解度を踏まえた指導は、学生の理解を深めることができ、臨床実習の満足感を高める可能性が示唆された。

臨床実習の満足感に、「環境要因」も有意な影響を及ぼしていた。因子分析の結果から、「環境要因」は「10. 臨床教育者と教員との方針が異なり、戸惑うことがあった」、「7. 教員からの指導や助言は適切であった」、「9. 施設全体として、良好な実習環境であった」という項目から構成されていた。「9. 施設全体として、良好な実習環境であった」という項目から、良好な実習環境を提供できたかどうかは、臨床実習の満足感に影響していることが明らかとなった。実習環境の要素として、アクセスの良さや設備条件等のハード面と作業療法部門の病院における位置づけ等のソフト面があり、その両側面が学生にとって良好であったことが、臨床実習の満足感に影響している可能性が示唆された。また、「環境要因」には「10. 臨床教育者と教員との方針が異なり、戸惑うことがあった」と、「7. 教員からの指導や助言は適切であった」という項目が含められている。カナダ作業療法臨床教育ガイドライン[11]によると、養成校の教員は、学生への指導だけではなく、臨床教育者に対するオリエンテーションやスーパービジョンを行うという役割も持っているとされている。そのため、教員と臨床教育者の指導方針が一致するように、実習前から指導方法についてオリエンテーションを行っていくことが重要であることが示唆された。また、教員が適切に指導や助言を行うことによって、学生・臨床教育者・教員の3者が、学校では何を教えていて、学生は実習で何を経験し、それがどの程度できているかについて確認しながら進めることができると考えられる。そして、これらの教員の関わりが、臨床実習を円滑に進めるのに効果的であり、学生の臨床実習の満足感に影響していた事が考えられる。したがって、学生が臨床実習に満足感を得るためには、養成校の教員が、適切な指導や助言を行なっていき、臨床実習に関与していくことが重要であることが示唆された。

本研究の今後の課題として以下の4点が挙げられる。1つ目に、本研究では、漠然とした「満足感」との関連をみているので、今後は満足感の定義を明確にし、何をもって満足感とするのか、何に対する満足感が高まったのかを明らかにして検証を行っていく必要がある。2つ目に、学生がどの部分について理解を深めれば、臨床実習の満足感を高めるのかについて検証していく必要があると考えられる。3つ目に、学生がどのような実習環境を望んでいるか、または望んでいないかについて、ハード面とソフト面の両方からより詳細に把握していくことも、臨床実習の満足感を高めるために必要であると考えられた。最後に、本研究で用いたアンケート内容は探索的に作成したものであるため、今後は本研究結果を踏まえて、アンケート内容をさらに充実させていく必要があると考えられる。

謝辞

本調査にご協力いただきました目白大学作業療法学科学生の皆様に、深く感謝申し上げます。

【文献】

1）日本作業療法士協会養成教育部：作業療法臨床実習手引き―第4版―.（オンライン），入手先<http://www.jaot.or.jp/wp-content/uploads/2012/08/rinshoujisshuVer.422203251.pdf>,（参照 2017-06-04）
2）World Federation of Occupational Therapists. Statement on occupational therapy.（on line）, available from <http://www.wfot.org/Portals/0/PDF/STATEMENT%20ON%20OCCUPATIONAL%20THERAPY%20300811.pdf>.（accessed 2017-06-04）
3）簗瀬誠，榎本貞保，石田友秋：学生が臨床実習において満足したと認識する要因について―数量化理論第Ⅱ類を用いた分析―．作業療法　17, 109-115（1998）
4）原修一，飯千紀代子，山田弘幸，天辰雅子，中山翼，大森史隆，笠井新一郎：言語聴覚士実習生の臨床実習への満足度に影響する要因―テキストマイニングによる検討―．九州保健福祉大学研究紀要 12, 149-155（2011）
5）奥宮太郎，森本剛，中島俊樹，小倉健紀，平田敦：臨床実習における学生の満足度に関連する因子の検討．医学教育 40, 65-71（2009）
6）片山由美，奥津文子：臨地実習目標達成度評価と実習満足度との関連―学生の満足度を組み入れた臨地実習目標達成度評価の考察―．京都大学医療技術短期大学紀要

23, 33-42（2003）
7）関裕也，松本直人，隆島研吾，関貴子：学生が満足する実習指導因子の検討．理学療法学　33, 334-337（2006）
8）中川米造：求められる教員の資質．臨床教育マニュアル―これからの教え方・学び方―．日本医学教育学会（編），篠原出版，pp51-55（1994）
9）會田玉美：クリニカルクラークシップに基づく臨床教育とは．OTジャーナル 49, 1114-1120.
10）中川法一：セラピスト教育のためのクリニカル・クラークシップのすすめ　第2版．三輪書店（2013）
11）Committee on University Fieldwork Education（CUFE）& Association of Canadian Occupational Therapy University Program（ACOTUP): Canadian Guidelines for Fieldwork Education In Occupational Therapy（2011）

（2017年10月6日受付、2017年12月1日受理）

Factors influencing satisfaction of occupational therapy students with respect to long-term clinical training

Tatsuya KANENO[1)] Sawako SATO[1)] Midori TOKITA[1)]

【Abstract】

Objective: This study aimed to clarify factors that affect the satisfaction of occupational therapy students who underwent long-term clinical training.

Methods: Sixty-two students who underwent 8 weeks of long-term clinical training participated in this study. A questionnaire surveying 12 items that may be related to achieving satisfaction from the training was used, and a factor analysis was performed. Multiple regression analysis was performed using extracted factors as independent variables and satisfaction with clinical training as dependent variables.

Results: Results of our analyses indicated that “environmental factor” and “understanding degree” affected the satisfaction achieved from the training.

Conclusions: The findings suggest the importance of support in order to improve clinical training environment, enhance understanding, and raise satisfaction with long-term clinical training.

Keywords : clinical training, satisfaction, occupational therapy students

1）Department of Occupational Therapy, Faculty of Health Sciences, Mejiro University